

青髭 2 1

明宏訊

ギュスターブ・ペリゴールは、やむなくアンリの命令に従って、差し出された羊皮紙を受け取る。アンリとギョーム、それぞれが書いた氏名が書かれている。長頭の少年のあずかり知らぬことだが、書式は正式な賭けの手順を踏んでいる。

いうまでもなく、ギュスターブは立会人として指名されたわけである。だが、彼は、いったい、これから何が起こるのか全くわかっていない。いや、理性ではわかっているのだが、感情を通過しないのだ。筋骨たくましい騎士と美少女が果し合いをしようとしている。主人とその弟はどちらが勝利するか、それを賭けている。

自らの運命を神にゆだねる遊戯、賭博は、底辺を生きる民たちの間でも、娯楽として昔から行われてきた。だから、その意味はわかっている。

だが、恐れ多くも青い貴族のやることに、賤民である自分が関わるとはこれまでの常識ではとうてい考えられないことだ。

彼の中では、生まれてからの刷り込みによって、政治や戦いは高貴、生産は下賤、という色分けがなされている。

具体的に言うならば、体内に流れる血の色が青、あるいは、赤、ということになる。彼は、自分が後者に色分けされていることを信じてやまない。決して、ふたつの色は混ざってはいけない。しかしながら、新しい主人が開催した、パリ、ヴェルサイユという僻地どうしの争いごと、いうなれば、戦の真似ごとはなんだっただろう？彼とても、土台を揺るがすような問題提起をされているはずである。だが、それを、理性はともかく、感情が受け止めることを拒否する。

だが、この、新しい主人の命令には従うべきだ。それは、彼があずかり知れぬ何者からの天啓かもしれない。とにかく、彼がいま在籍している感情レベルにおいても、アンリをかなり好きになっていた。青い貴族が、自分をこれほどまでに大切に扱ってくださる。もしかして、やむごとなき人の気まぐれや物見山的な気まぐれかとも思ったが、これまで同じ時間を過ごしてきて、彼らに抱いていた神に対するような畏怖心は薄れつつある。

さて、そうであってもまるで針の山を通るような心持で、彼が見たこともない門を潜ることになったのである。

そうはいっても、彼も自覚はまったくないが青い貴族、身体の中で何かが目覚め始めていたこともまた事実である。そして、それは彼に対してある疑問を提示していた。そういう自分自身に気付くためにはまだ一定の時間を要するようだ。

一方、彼の視線の先には、美しい青い血の持ち主たちがいる。彼らの行動に彼の神経は釘づけになっている。

彼の主人は、弟であるルイに近づいていく。そして、何事か囁いている。その内容はギュスターブは想像できない。まさか、あのような華奢な女人に立ち向かうのにアドバイスが必要だとは思われない。

おそらく、あの筋骨たくましい騎士は手加減するのだろう。それでなくては一撃であの美しい顔

が張り裂けてしまいそうだ。

アンリとルイは、ギュスターブの想像の全く範囲外のことを話し合っていた。

「母上は寢室をお代えになったのか？」

何故にそのような質問を兄上はするのか、という表情を隠さずに、「まさか、以前のお部屋をお使いです」と素っ気なく囁きに応じる。

「……………」

伯爵が興味深そうにアンリに視線を走らす。しかしながら、17歳の美少女は自分が家臣たちのつぶやきに気付いたふりなどオクビも見せずに、まるで独り言のようにギョイエヌ城を褒めちぎりはじめた。

「私、ナルボンヌに言ったことがあります、メルヴェイユ城などただ巨大なだけで、いっそのことこちらの方が雅だと思いたくもなるそうですわ」

宮廷で流行っているという、自分のことを三人称的に表現するのが貴婦人の間で流行っていると、伯爵がしたうちするのを聞いたことがある。

それを自らなさいますか？

アンリは、ルイと会話をつづけながらも、主人に神経を裂かねばならない。

閣下、家臣にはあいにくと高貴すぎる人の心根には届くほど広い腕を持ち合わせておりません……。

思わず愚痴が溜息にかわる。

芝居をしているのか、現実を体験しているのか、夢想におぼれているのか、曖昧になっていく自分を否定できずにいた。破れかぶれで、話を合わすしかないのだが、この場で自分だけが真実を知っているとおもうと、あまり滑稽でそれと知らない三人よりも惨めに思えた。

さて、朝日はいよいよ地平線から押し出されようとしている、山際が輝きを増したとき、二人は中庭で剣を持って端と端に位置していた。

青い血の持ち主にとって、剣とは単なる力の象徴にすぎない。切れ味などほとんど関係がない。ただ美術品としての価値のみが重要とされる。

剣の職人は平民である。かつて、太古にて貴族と平民がどのようなファーストコンタクトを持ったのか、聖職者や学者の意見の分かれるところだが、前者が後者に火を与え、逆に後者が前者に剣を奉ったと、神話にはある。

「さて、ご同輩、はじめましょうか？」

儀礼通りに、美少女もとい伯爵が、前に進みでる。同輩とは青い貴族ということ、いうまでもなく意味する。

彼女は、先ほどまでもそうだが、筋骨たくましいルイを目の前にしてまったく怯えていない。それどころか、逆に相手を呑んでしまいそうな顔をしている。むしろ、後者の方が相手を警戒しているように映る。

「え？そんな……」

ギュスターブ・ペリゴールは息をのんだ。あの細い手首の何処にあのような幅広の剣を持ち上げる力が秘めているのだろうか？やはり青い血は恐ろしい。尊崇しながらも、みずからが賤民だとみなして疑わない彼は、ここにいる人たちが自分とは違う存在なのだと、自分に言い聞かせた。そうしなければ、思わず増長してしまう自分を見つけてしまうからである。このような素晴らしい人たちに対等に扱われることが、おこがましいと思わねばならないのだ。きっと、やむごとなし人たちが、自分をからかって遊んでいるにちがいない。趣味の悪い人たちでは、ある。少年は改めて嘆息せざるをえない。おそるべき人に仕えてしまった。

さて、ルイもそれに応じる。兄は、彼の表情に好戦的な色を見つけた。やはり、彼は相手を自分と対等か、それ以上にみなしている。彼ほどの戦士が敵手を相手にこれほど興奮するところをみたことがない。たしかに、幼いころのように外に露わにはしないが、兄であるアンリや、おそらく、伯爵などは簡単に見抜いてしまっているのだ。

「いかなる結果に終わろうとも、誰も恨まず　しかし、それはお立合いの方々も同様のことよろしいな！　ご同輩！」

ルイもまた、儀礼通りの挨拶を終えた。それに呼応するようにアンリとギョームが了と古代語で叫ぶ。

しかし、もう一声、がない。それをおかしいと思っているのは、ギョームとルイのふたりである。その彼らに、睨みつけられた少年は縮み上がった。しかし、優しい主人に促されると、彼が密に囁きかけた通りに、古代語を発語する。

それを合図に二人の剣がまさに文字通りの意味で干戈した。

「あーあ！！？」

思わず、ギュスターブは哀れな声を上げた。その瞬間、猛牛を思わせる突進と剣のふりを目撃した彼は、すぐに一方が一方に押し物される様子を想像したにちがいない。

だが、事実は違った。

これは、アンリの予想通りに実力は伯仲していた。互いに青い稲妻を発しながら剣を交えている。ルイの方が背丈が高いために、骨格的には余裕があるように見えるものの、食いしぼる歯や頬からも必死であることは明白だ。

なんということだろう、アンリは生まれてはじめて主君が命を懸けるほどの力を振り絞っている姿を見せつけられているのだ。

「う、美しい……」

従子爵はいつのまにか、そう口走っていた。涙すらうっすらとにじませている自分に気付くと、どのような表情をつくっていいのかわからない。

そうだろう、ここにいる三人の青い貴族に偽りの像を見せながら、なお、戦っているのだ。いまのところ、ギュスターブがどのくらいのレベルなのかわからないが、アンリとギョームは、ランクでいえば、少なくとも準一流、とでもいうべき階梯に位置している。それを騙すのだから、伯爵といえども能力は限られているにちがいない。

その証拠が、あの表情だ。アンリは、17歳の少女の像の背後に、本来の主君の姿を思い浮かべてみた。すると、不思議なことに、ありありと浮かんでくるではないか。だが、彼がよく見知って

いるはずの、壮年の主君ではなくて、ちょうど、17歳くらいか、それよりもすこしばかり年少の、伯爵を垣間見たような気がした。

普段ならば、これほど凝視していれば、向こうが気付かない、ということはあるに違いない。しかしながら、今は、ルイの攻撃を凌ぐのに神経を集中させすぎて、こちらに割く余裕はまったくないようだ。そのおかげで普段は観察できない主君の、貴重な艶姿を拝むことができるというものだ。

もはや、自分に対する客観視はあきらめた、ならば誰かを冷静に見ることは可能だろう。ギョームはどうか？彼はどんな風に思い人をみているのだろうか？

「だ、誰かに似ておられる……」

まだ少年の、あどけなさを残した唇が動いたかとおもったら、弟はそんなことを口走っていた。

兄が内容を質問する以前に、弟は付け加えた。

「兄上、まさか、あの方は伯爵閣下の係累であられるのでは？」

「ギョーム、何を言っているのだ？アネモーネ・ド、ヴァロアと名乗ったではないか？それよりもだ、そなたは殿に出会ったことがあるのか？」

「一度、拝見したことがあります。兄上が出奔なされてしばらくして、わが城に」

「……………?!」

そんなことは聞いていない。いや、べつに、主筋が家臣の城を尋ねて悪い道理がない。しかし、あの日の光を浴びることを避けてきた主君が、そのような拳に出たとはよほど重大なことがあったにちがいない。だが、父上は常に城に詰めていたはず。もしかして……

「もしや、父上はご病気であられたのか？」

「いえ、父上はおられませんでした。ご自分が来訪したことは父上に伝えるなど、閣下はおっしゃってました」

「で、どうして殿の係累だと？」

「あれほど、美しい同性を、私はみたことはありません。評価することは恐れ多いぐらいです」

「そうだな、臣下にあるまじき行状だ。しかし、そんなに似ていると？」

「……………」

ギョームは、二人の試合に心を吸い込まれつくして、兄への返事を忘れてしまっていた。